「覚えておいてね」

建内真由子　（40 代）

四歳になる娘の最近の口癖は、「覚えておいてね」。

「ねえママ、ゆきちゃんね、プリンセスの歯ブラシが欲しいの。覚えておいてね！」

「保育園から帰ったらあのテレビ見る。覚えておいてね！」

「次のお休みに、ママと工作するの。覚えておいてね！」

いつもはそう言われたら「はいはい」と聞き流しているのだが、日中忙しくて疲れていたある夕方、何度も聞かされてつい苛立った私は娘にこう言った。

「なんでも『覚えておいて』って人任せにしないで、自分で覚えておけばいいじゃない。」

すると娘は思いがけず悲しそうに言った。

「だってね、ゆきちゃん、すぐに忘れちゃうんだもん。」

それを聞いて私ははっとした。そうか、彼女は、まだ四歳の自分の記憶が不確かなことを自覚しているのだ。印象的な出来事を大人が驚くほど詳細まで覚えていることがある一方で、日々の些細な事についてはすっかり忘れてしまうことも多い。こちらとしては都合の悪い約束なども忘れてくれるのでありがたいくらいだったが、本人は抜け落ちた記憶の穴になんとなく気付いていて、歯がゆく切ない思いをしていたのだろう。

「そうだね、ごめんね。今はまだ難しいかもしれないけど、もう少しお姉さんになったらたくさんのこと、ずっと覚えていられるようになるからね。」

「本当？」

「本当だよ！それまでは、ママが全部、代わりに覚えておいてあげるね。」

私がそう言うと、娘は安心したようにようやく笑顔を見せたのだった。

その晩、娘を寝付かせる時間になった。絵本を読み終わり、ベッドの上に二人で横になっていると、唐突に娘が聞いてきた。

「ねえママ、女の人と女の人は結婚できるの？」

私は少し驚いたが、一生懸命考えながら慎重に答えた。

「そうだね、日本では結婚はできないけれど、場所によってはそれに近いことはできるはずだよ。でね、もしかしたら、ゆきちゃんが大人になる頃には、結婚もできるようになっているかもね。外国では、そういう国もたくさんあるよ。」

「ふうん…。」

そう言うと娘は考え込んでしまった。うまく伝わらなかったかなあ、と私はモヤモヤしていたが、しばらくして彼女はとびきりの笑顔で「決めた！」と言った。

「ゆきちゃんね、大人になったら、ママと結婚する！だってママのことが一番大好きだから。覚えておいてね！」

私は胸が熱くなるのを感じた。そうか、女性同士が結婚できるかと聞いたのは、そういうことだったのか…。しかし娘よ、それ以前に親子は結婚できないのだよ。

それにしても、なんと無邪気で、荒唐無稽で、素敵な愛情表現だろう。きっと本人はこの先すぐに忘れてしまう、ママが世界のすべてだった頃の、記念碑のようなプロポーズ。嬉しくて可笑しくて愛しくていじらしくて、私はほとんど泣きそうだった。

「うん、覚えておくよ。約束する。ずーっと、ずーっと、覚えているからね。」

そう言って抱きしめると娘は満足げに微笑み、ほどなくして眠りについた。